

審査の結果の要旨

論文提出者氏名 阿部衛（あべ まもる）

論文題目 帝政前期における剣闘士とローマ社会

古代ローマの治世を象徴する言葉として「パンとサーカス」という言葉があるように、「見世物」の文化はローマ社会に深く根差していた。そして、古代ローマ社会の中でもとりわけ大きな位置づけを占めていた見世物は、戦士たちが互いに、あるいは野獣相手に戦う剣闘士競技であった。都市大衆の人心を収攬する施策として名高いこの剣闘士競技については、政治史・社会史を含め着実な研究の積み重ねがあり、同競技がどのように帝国内での広がりを見せ、帝国統治の安定化に寄与したかが分析されてきた。本論文も、この剣闘士競技の変遷を正面から捉えるという点で極めて王道的な研究と言える。しかし、従来の研究は競技催行者あるいは観衆から見た剣闘士競技の意義に主として注目してきた。これに対し、本論文は競技に参加する剣闘士自身を主たる分析対象に据え、彼らの置かれた境遇の仔細な分析を通じて、ローマ帝国内の諸社会集団にとっての剣闘士競技の意味を描き出した点に大きな独自性がある。本論文は序章と終章に加えて、六つの章からなる本論によって構成されている。以下、各章の内容と意義を概略する。

序章は、古代ローマの剣闘士競技に関する先行研究を整理し、その分析手法や研究対象の変遷に関してまとめている。研究史の通覧を通じて、剣闘士競技に参加する剣闘士の分析がこれまで手薄であったこと、また、剣闘士は下層民であると無批判に考えられ、剣闘士の身分の動態的变化は着目されてこなかったことなど、先行研究の問題点が指摘される。そこから本論文では、参加する剣闘士たちに着目し、彼らの社会的出自を社会階層ごとに分けて考究することで、帝国を構成する様々な社会層にとってそれぞれどのように剣闘士競技が捉えられてきたかを明らかにし、これまでに着目されなかった剣闘士競技像を描くことが宣言される。それと関連して、論文中で扱う史資料の性格についても論じられる。

第1章は、ローマ社会に広まった剣闘士競技のあり方を総体的に描き出す。皇帝崇拜と関連した支配論理の植え付けという中央政府にとっての剣闘士競技の意義と、地方社会における剣闘士競技の都市自治的性格という、従来の二つの研究潮流を紹介しつつ、この二つの流れを接続することが目指されている。そこからは中央と地方の両者が剣闘士競技の維持をめぐって利害を共にしていたことが指摘され、帝国社会の構造に組み込まれた剣闘士競技のあり方が描き出される。

第2章は、剣闘士に熱狂しその武勇を肯定的に捉える一方で、剣闘士を法的な差別のもとに置いたり、否定的な言説で扱ったりするローマ人の矛盾する態度を分析する。剣闘士を積極的に評価する姿勢はローマの諸階層全体にわたって広く認められる一方で、差別に関しては、その具体的な法的不利益を詳細に検討するかぎり、対象とされているのは社会的に高

い身分に属する者であることが判明する。また、共和政末期の政治家キケロがその作品中で用いている「剣闘士」の用法から、同一著者のなかでも政治的文脈に応じて肯定的にも否定的にも用いられる場合があることが確認される。以上から、剣闘士という存在をひと括りに扱うことが、「矛盾した存在」としての剣闘士像を生じさせてしまうという問題点が指摘され、剣闘士の出身階層に応じた詳細な分析の必要性が改めて主張される。

前章の議論を受けて、第3章から第6章は剣闘士をその出身階層ごとに分析する形になり、第3章ではまず奴隷出身の剣闘士が扱われる。章の前半では、剣闘士の多くは競技の中で死亡し、剣闘士として供給される奴隷も罪人など処刑の対象であったという理解が検討の俎上に載せられる。碑文史料に加え、図像資料や法史料なども含めた分析からは、剣闘士の死は決して自明ではなく、むしろ剣闘士がかなりの程度生き延びた可能性が指摘される。そして、章の後半では、剣闘士が新しい人的紐帯を築き上げ、さらには引退の後に、自由身分と新しい活躍の場を与えられる過程が描かれる。そこからは、社会的下層の人々に、社会内の居場所を与え、ときにその人気を背景にした社会的上昇を遂げさせるなど、剣闘士競技が持った社会的弱者の再生の機能が浮かび上がる。

第4章では、一般の自由人が剣闘士となる事例が論じられる。従来、自由身分の人物が剣闘士競技に参加するのは稀とされてきたが、本章では墓碑から確認される剣闘士の名前や法史料上の雇用契約を分析することで自由人の参加も恒常的なものであった可能性が高いとする。そして、自由人の剣闘士競技参加を抑止するものとして理解されてきた法的措置も、騎士身分や元老院議員身分などの上層民や、判断力の未熟さゆえに保護されるべき若年者層を念頭に置いた限定的なものであることが綿密に立証される。最後に、軍団兵になる代わりに剣闘士になることを選んだという史料上の言説が個別的な状況を示しているのではなく、軍制改革以後、剣闘士競技が一般人にとって現実的な職業選択たりえたことを指摘する。

第5章は、騎士身分や元老院議員身分などの上層民の参加が検討される。従来、文献史料に現れる上層民の参加は例外的な社会的逸脱として扱われてきた。これに対し、本章では参加規制の変遷や、皇帝が上層民を剣闘士競技に参加させた事例をつぶさに追うことで、後1世紀末までは上層民の参加に関する社会の評価が揺れ動いており、参加を受け入れる姿勢も根強く存在したことが明らかにされる。そして、武勇のたしなみを示すために有力者の子弟が剣闘士の技芸を身につけたこと、それが帝国西方各地の青年団の活動からも裏付けられることが示され、上層民にとっての良き慣習としての剣闘士競技像が描き出される。

最後の第6章ではローマ皇帝の剣闘士競技に対する取り組みが扱われる。とくに2世紀に入ってから、武勇の美德を備えることを求めた皇帝たちによって英雄ヘラクレスのイメージが用いられ、それに関連して、武勇の象徴的な存在であった剣闘士も皇帝の統制下に置かれていく。ここで描き出された皇帝像は、自ら剣闘士として舞台に立ったコンモドゥス帝の「奇行」を論理的に説明できるという利点を持っている。

終章では、本論の内容を総括した上で、催行者、観衆、参加者の三者を通して剣闘士競技を見ることで、ローマ文化の中に根付いた同競技の姿と、それに対する人々の多様な関わり

方をまとめ上げている。

本論文の学術的価値として、以下の二点が主要なものとして挙げられる。第一に、競技催行者や観衆ではなく、競技に参加する剣闘士たちに徹底して視点を据えたことで、静態的で画一的に描き出されがちであった剣闘士像に、立体的な奥行きと生々しさを与えた点である。剣闘士と言うと奴隷を念頭に置きがちであるが、本研究は自由人の参加がそれなりの割合を占めた点を重視し、剣闘士競技がローマ社会内に占めていた位置づけについて新しい意義を与えることに成功している。また、文献史料から描かれる「矛盾する剣闘士像」を克服するとともに、上層民も含めて社会内で高く評価されていた剣闘士のあり方にスポットライトを当てた功績は大きい。このことはローマ帝国下の政治言説を解明する斬新な視角をもたらすのに加え、ローマの伝統文化の中での剣闘士競技の位置づけに関して一石を投じるものと評価することができる。

第二に、ローマ共和政末期から帝政前期にわたる剣闘士関連の史資料を広く収集し、総合的な解釈を提示したことがある。近年の剣闘士競技に関わる研究は、個別事例の詳細な検討には優れる一方で、中央と地方それぞれの視座、碑文・文献・美術など多岐にわたる史資料群、ローマ帝国を形成する多様な社会層を総合する試みは少なかった。本論文は、剣闘士競技が時代を通じてどのような変化をしたのかという通時的な面と、それぞれの社会層に応じてどのように見られたのかという社会横断的な面での見取り図を提供しており、古代ローマにおける剣闘士競技の社会的機能を考察する上で、今後参照されるだけの十分な情報量と展望力を擁していると評せる。

ほかにも論文内の随所で先行研究の解釈を修正する独自の論考がちりばめられていることは高く評価できる。それらの解釈は、該当する史料に対する重要な歴史学的註解として機能するとともに、論文全体に学術的に読みごたえのある内容を与えている。

本論文の上記のような長所は審査員全員から評価された一方で、審査の間ではいくつかの問題点も指摘された。例えば、先行研究の紹介、説明が簡略なうえ、他説を論駁する姿勢がやや弱く、論証の説得性を減じているところが多々あった。また、イタリアと属州地域との違いや、イタリア内での諸社会層のあり方などについての説明がいささか捨象される傾向があり、それぞれの事例をどのように帝国全体の中に位置づけるべきかが不明瞭である点も指摘された。さらに、エピソード的で少数事例と思われる、皇帝や社会的上層の剣闘士競技参加と、恒常的な奴隷、自由人の参加との接続については一層の説明が必要であるとされた。しかしながら、これらの指摘は論文提出者が今後研究を発展させる上での注意点を助言する性格のものであり、本論文が持つ学術的価値を否定するものではない。

以上のことから、審査委員は全員一致で、本論文が博士論文として十分な水準に達していると判断し、博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定した。

| 審査委員会委員名 |      |      |       |
|----------|------|------|-------|
| 主査       | 東京大学 | 准教授  | 田中 創  |
|          | 東京大学 | 教授   | 高橋 英海 |
|          | 東京大学 | 准教授  | 藤崎 衛  |
|          | 東京大学 | 名誉教授 | 本村 凌二 |
|          | 上智大学 | 准教授  | 中川 亜希 |